

第10節

अकामः सर्वकामो वा मोक्षकाम उदारधीः ।
तीव्रेण भक्तियोगेन यजेत पुरुषं परम् ॥ १० ॥

*akāmaḥ sarva-kāmo vā
mokṣa-kāma udāra-dhīḥ
tīvreṇa bhakti-yogena
yajeta puruṣam param*

akāmaḥ—すべての物質的望みを超越した者; *vā*—どちらも; *mokṣa-kāmaḥ*—解放を望む者; *udāra-dhīḥ*—広い知性で; *tīvreṇa*—強い力で; *bhakti-yogena*—主への献愛奉仕によって; *yajeta*—崇拝すべきである; *puruṣam*—主; *param*—至高の全体者。

物欲をすべて満たしたいと思っていようが、物欲がまったくなくなろうが、あるいは解放を求めているようが、広い知性を持つ者は必ず至高の全体者・人格主神を崇拝しなくてはならない。

要旨解説

最高人格主神、主シュリー・クリシュナは、『バガヴァッド・ギーター』で*puruṣottama* (プルショッタマ)・最高人格者と表現されています。非人格論者が主の体から出ている光・ブラフマジヨーティのなかに入りたいと望んでも、それを叶えるのはほかならぬ主です。ブラフマジヨーティと主は離れているわけではありません。太陽の光が太陽本体と離れて存在していないのと同じです。ですから、至上の非人格的ブラフマジヨーティに入りたがっている人でも、『シュリーマド・バーガヴァタム』がここで勧めているように、バクティ・ヨーガで主を崇拝しなくてはなりません。この節では、完全な完成を手にする方法としてとくにバクティ・ヨーガが勧められています。前の章では、バクティ・ヨーガがカルマ・ヨーガとギヤーナ・ヨーガの究極目標であると言われましたが、この章でも、バクティ・ヨーガはさまざまな半神を崇拝する多様な方法の究極目標であることが強調されています。自己を悟るもっとも高い方法だから勧められているのです。ですから、だれでもバクティ・ヨーガを真剣に実践しなくてはなりません。物質的な楽しみや束縛からの解放を望んでいるとしても。

Akāmaḥ (アカーマハ) は、物質的な望みを持たない者、という意味です。生命体は、至高

の全体者「*puruṣam pūrṇam* (プルシャンム プールナンム)」の部分体ですから(体の一部分のように)、もともと至高の生命体・完全体に使える機能を自然にそなえています。ですから、「無欲」とは、石のようになにもなくなるのではなく、自分のほんとうの立場を意識し、至高主の満足だけを望むようになる、ということです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、自著『サンダルバ』で、その無欲の境地を *bhajanīya-parama-puruṣa-sukha-mātra-sva-sukhatvam* (バハジャニーヤ・パラマ・プルシャ・スカハ・マートゥラ・スヴァ・スカハトゥヴァンム) と説明しています。これは、「至高主の幸せをみずから体験し、その体験をとおして自分も幸せになる」、という意味です。生命体のこの本能は物質界の条件づけられた状態でも現われ、未発達の知性しかない愚かな人たちが、利他主義、博愛主義、社会主義、共産主義などを唱える様子に見ることができます。通俗な世界で見られる社会・地域社会・家族・国・人類のための善行は、「至高主の幸福をとおして自分も幸福になる」という純粋な生命体の本来の感情が部分的に現われているのです。その優れた感情は、主を幸せにすることしか考えていないヴラジャブーミの乙女たちが示しています。見返りなど思わずに主を愛していましたが、この思いこそが、*akāmaḥ* (アカーマハ) の特質の完璧な現われです。カーマの特質、すなわち自分の満足を求めるきもち、物質界で完全に現われていますが、アカーマの特質は精神界で完全に現われています。

主と一つになる、あるいはブラフマジョーティと融合するという考え方は、それが物質的苦しみから救われたい一心からの望みであれば、それもカーマの特質の現われです。純粋な献愛者は、解脱を達成すれば生活の苦しみからも解放される、とも思いません。よく言われる「解放の境地」さえ望まず、主を満足させることだけ考えています。アルジュナはカーマの特質に惑わされていたので、クルクシェートラの戦場で戦うことをためらっていましたが、「親族を救う、そして自分も満足する」と思っていたからです。しかし、純粋な献愛者でしたから、主の教えどおりに戦うことにしました。まちがいに気づき、自分の満足を犠牲にしても主を満足させるのがなによりも大切な自分の義務である、と悟ったからです。そしてアカーマになりました。それが完璧な生命体の完璧な境地です。

Udāra-dhiḥ (ウダーラ・ディーヒ) とは、広い視野のある人のことです。物質的な楽しみを求める人たちはちっぽけな半神を崇拜しますが、その程度の知性は『バガヴァッド・ギーター』(第7章・第20節)で、*hr̥ta jñāna* (フリタ ジャーナ) 「分別を失った者の知性」と非難されています。半神を崇拜しても、至高主の許しがなければ結果はいっさい得られません。ですから広い視野のある人は、物質的な望みを叶えるにしても、それを授ける究極の権威者は主であることを知っています。だからこそ広い視野を持つ人は、物質的な楽しみや解放への望みを持っているとしても、主を直接崇拜しなくてはなりません。そしてだれであっても、アカーマであろうとサカーマであろうと、そしてモークシャ・カーマだとしても、できるかぎりの便宜をはかって主を崇拜すべきです。これは、バクティ・ヨーガはカルマ

やギーナにかかわることなく実践できる、ということも含まれています。直射日光はその強力さゆえに*tivra* (ティールヴァ) と呼ばれますが、同じように、聞く、唱えるというバクティ・ヨーガはほかのなにものとも混ぜる必要がなく、心にどんな動機があっても、だれにでも実践できます。